



## 「ふるさとの花々」



盛一 昭代（千葉市）

日 時：2009 年 4 月 12 日（日）13～15 時

参加者：24 名（大人 20 名 子ども 4 名） 指導員 24 名

担当指導員：福田洋 小川洋子 盛一昭代

4 月の第 2 日曜日頃は、例年桜が満開、カタクリも最後のひと花を咲かせていたが、今年は 1 週間早く見頃が去り、その代わり、雑木林の芽吹きがグラデーションが素晴らしく山笑うがごとしだった。樹下のヒトリシズカ、スマレ、イカリソウ、ウランマソウ等も咲き揃い、林縁ではキブシ、クロモジ、モミジイチゴ、ヤマツツジが花枝を伸ばしている。マルハナバチやスズグロシロチョウも飛び交い、受粉を助けている。カタクリの実もだいぶ膨らんで、次代に命をつないでいる。もちろん里山の管理次第では、木も花も虫さえも絶滅しかねないのだ。

写真集「失われゆく千葉の植物」「守ろう千葉の植物」を出版された福田洋氏を担当にお願いし、直前に撮られた植物カラー写真の資料を指導員は頂いている。1995 年 7 月の観察会では珍しいタシロランの群落を発見された。今回は、あるはずの植物が、残されているだけで良しとせねばならない。公園境界林の伐採、遊具、バリアフリー化優先も、都市公園としてはいたしかたがない事だ。

中しよぶ田からカタクリの斜面を昇りながら、雑木林の下のカンアオイの花をさぐる。1 万年に 1km の速度で三浦半島から房総丘陵を北上している。カタクリは、氷河期から昭和の森にとどまってシンボルとなっている。カンアオイを食草とするギフチョウがカタクリに吸蜜に来る夢は、千葉では、実現可能であろうか？

ベテラン福田氏のきたえられた解説の声が快くひびく。新人小川さんは、子供グループを春の自然の中で楽しく導いている。私は、桜の広場でカントウタンポポのじゅうたんに寝ころび、スマレと遊ぼうかと思っていたのに、側にくっついて「シナレンギョウとチョウセンレンギョウの区別はどこですか」等としつこく聞く人がいて、ままならない。「来月来て下さったら調べておきましょう」とごまかしたが、5 月には体調が悪くて行く事が出来なかった。多分、そういう方は、他の植物観察会に行ってしまうだろう。毎月テーマを変えて定点観察をする事がどんなに勉強になるか、1 年以上続ければ理解できる事だが、昭和の森のリピーターが少ないのは何故なのか気にかかる。その代わり指導員はよく定着され、担当は切磋琢磨しているので、毎月参加しないともったいない気がする。

その中でも一番張り切っている若大将の佐野さんが、昭和 16 年出版の「自然の観察」の復刊本が今年発売されたと紹介された。小学校低学年教師の参考書だが、正に戦後出版された「センス・オブ・ワンダー」と同じ思想の内容だったので驚いた。同じ年の私と福田氏が母の胎内に芽生えた、軍国主義の最中に、いくら教練が目的とは言え子供達に教科書はいらない、自然の真の姿を五感を使って自ら体験させよと諭した指導は立派である。「1 日を費やして、野山の豊かな、生き生きとした調和のとれた自然を体験させ、我等の人生を支えている国土になつかしきを感じさせる」この程度の初等教育は、現代も必要なのではないかと思う。